

タイトル:平成 20(2008)年度 教育セミナー

日時:平成 20 年 9 月 16 日(火)～19 日(金)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

### 生田 篤(九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻修士課程)

去年も本セミナーに参加させていただいたが、今年連続で参加したのは私一人であった。本来なら修士論文の中間発表をしたいところであったが、セミナーの時点ではこの文章を書いている現在と比べても論文の体裁を成していなかったため断念した。次は発表するものを持ってセミナーにくることを自分に言い聞かせたい。

反省はさて置き、私のみが述べることのできる点として、二年連続で来たことの効果を述べていきたい。最初にセミナーにおいて去年と違う先生方の発表を聞くことができたのは有意義であった。例えば東京外国語大学の先生に関してのみ言及しても、去年は大塚先生や林先生、酒井先生といった錚々たる先生方のお話を聞くことができた。それに加えて今年は飯塚先生や高松先生、西井先生がセミナーをなされた。いずれの先生方も去年のプログラムにおいてお話をされていなかったのも、大変有難いことであった。

二つ目には、私以外のセミナー参加者の方が殆ど初めてお会いする方で、また新たな交友関係や研究に関する情報を得ることができた。去年も言及したが、私と同じくパレスチナに関する研究を行っている方も何人か新たに知り合うことができた。話を伺っていると、例えば指導してもらっている教員に中東を専門とする人がいないといった悩みが案外私だけでなかったことに気付く。去年も言及したが、私にとって教育セミナーは中東やイスラーム(私の場合はムスリムと言ったほうが適切であるが)を研究対象とする人に出会うことのできる、日ごろは得がたい機会であった。このような機会を後の研究に生かすことができれば幸いである。

最後に、今回セミナーに来た経験が九州にて現代の中東やイスラーム(ムスリム)の問題について研究をするという私自身のあり方を再考する機会になった。これは私自身の個人的な問題であった。ここ数年現代中東・イスラームへの研究をするにあたって、九州に居続けていいのかと疑問視されることへのジレンマが少なからずあった。今回のセミナーにおいて中東・イスラームに関連するというテーマの中で多様な研究者の方が集まっていた。この事は、私にとって一つの開き直りをさせるいい機会であった。自分は九州で頑張らなければならないし、そこでこそやるべきものもあると考えるにいたった。具体的なことをここでは言及しないが、その成果や経過を次に参加するセミナーで示していきたい。

末筆ながら、今回のセミナーを運営して下さった先生方・スタッフの皆様に厚くお礼申し上げます。

## 大井 直之(東京学芸大学大学院教育学研究科社会科教育専攻哲学・倫理学コース修士課程)

私はこのセミナーを指導教官の紹介で知った。当初、イスラームを専門的に学び始めて約半年足らずということもあり、このようなセミナーに自分が参加して、議論についていけるのか不安であったのが正直なところである。しかし、現在の学校の状況では他の研究者との交流も少なく、自らの中東・イスラームへの見地を広げようと応募を決意した。以下、中東・イスラーム初心者である私が、このセミナー全体を通して抱いた感想を率直に述べたい。

まず、セミナーの内容であるが、どの講義・発表も普段研究室に籠っているだけでは決して聞くことができない貴重なものばかりであった。さらに、講義や受講生の発表は、その一つ一つがより丁寧、詳細に説明され、初心者の私でも興味深く聞くことができた。その中でも特に印象に残った内容は、多くの発表の中で議論された「イスラームだけでは、問題は解決されない」ということである。確かに私たちが現在研究を行っている分野には、イスラームという巨大で難解な宗教(単に宗教とは言えないが)が少なからず関わっている。しかし、イスラームを知れば世界が分かるといった、よく考えれば疑問を抱かざるを得ないことに、私たち(特に私)は注意を怠っているときがある。私自身は、19世紀エジプトにおける思想家ムハンマド・アブドゥフの思想研究を行っているが、ムスリムである彼の思想を論じる上でさえイスラームだけでは語れない、歴史上の他国との関わり、彼の政治上の立場等々、考えなければならない問題は多く、より多面的な視点から研究に取り組む姿勢が必要であることを再確認することができた。

またセミナーを通じて、分野の相違に関わらずその議論に積極的に参加する難しさも痛感した。その難しさとは、ただ単に質問をするタイミングが分からないとか、そういった問題ではない。他の質問者の内容は、自分とは注目すべき点が異なり、その質問が発表の核心を捉えており、そのような意見、質問を自分は考えることができなかった。分野に関わらず論文の核となる部分、それをしっかりと把握し、そこから見えてくる疑問、課題を導き出すことは、自らの研究を進めていく上でも欠かせない作業である。本来当たり前であるが最も重要なことも再確認することができた。

4日間を通して感じたこのセミナーの魅力的なところは、講義や発表以外でも先生方や参加者と意見を交えることができることである。昼食時、懇親会、打ち上げの場で、どんなに些細な質問でも先生方は丁寧に応じて下さったため、本当に多様なお話を伺うことができた。また、全国の研究者の皆さんと知り合えたことも私の大学院生活で本当に貴重な財産となった。以上を踏まえた上であえて要望をあげるならば、これまで行われたセミナーの内容を、より詳しくパンフレットなりホームページなりに載せていただくと、参加を希望する学生もより具体的な目的を持って参加できるのではないか。最後に、このセミナーを準備して下さいましたスタッフの皆様、講義や議論に参加して下さった先生方には、心から感謝を申し上げます。

## 奥 美穂子(明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程)

今年度の教育セミナーは募集に対し受講生がいささか少なめであった。しかし逆に発言の機会を得やすかったことや、先生方とも密にかかわりあうことができた点において、受講生としては幸運であったように思われる。

まず驚いたことは「中東・イスラーム」という名の下に集った研究視点の多様性である。以前より意識はしていたものの、実際にセミナーに参加してみると、地域や時代だけでなく、人類学、地域研究、歴史学といった実に多様なまなざしが存在することを実感した。普段、他分野の研究発表を聞く機会が少ない中で、短期間のうちにそれらの研究手法や多角的な視点に触れることができたのは、このセミナーにおける最大の収穫となった。それと同時に自分のディシプリンを再確認する良い機会ともなり、この点において最良の刺激を受けることができたと感じている。

また、自身が用いる用語定義に対する責任や研究テーマに対する問題意識の重要性、あるいは自身の研究軸の設定、といった点についても常に議論の対象となった。これも様々なフィールドの人間が集まったからこそ浮き彫りされた論点であり、他の研究会等で今更ながら学ぶことは難しいかもしれない。このような中、講義や質疑応答で交わされる先生方の鋭く示唆的な提言は、今後研究を続けていくための大きな糧となった。

悔やまれる点をあげるとすれば、自分の不備により研究発表ができなかったことぐらいであろう。次回参加される方は是非とも気負わず研究発表を申し出て、良質のアドバイスを存分に得るとよいと思う。しかし一方で、先生方はこちらが事前に提出した研究要旨にちゃんと目を通してくださっており、それをもとに懇親会や昼食時に様々なアドバイスを頂くことができた。こちらからは緊張してなかなか話しかけられものだが、先生のほうから気さくに声をかけてくださったことに大変感謝している。まとめてしまえば、一流の先生方と4日間過ごすだけでも多くの学びを得ることができる、ということである。

このプロジェクトは来年で一度区切りとなるということであったが、是非とも継続していただきたいと思う。また、自分自身も研究を深め、次回は研究セミナーの参加を目指したい。

末筆となり恐縮ではありますが、お忙しい中ご参加くださった先生方、本セミナーの企画、運営に携わってくださった方々に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 小椋 千裕(筑波大学大学院人文社会科学研究所国際公共政策専攻)

今回、東京外国語大学での中東・イスラーム教育セミナーに参加し、4日間にわたる有意義で、刺激的な時間を過ごすことができた。以下に、簡単ではあるが、本セミナーで特に印象に残った経験や感想を記す。

まずはじめに、中東・イスラーム研究の諸先生方が一堂に会する中で、様々なディシプリンによる講義が行われた点である。自分の所属する大学において中東・イスラーム研究が盛んであるとはいえない状況にあり、当然それを専門とする研究者ならびに院生の数も僅かばかりでしかない。そのため、今回のような多数の先生方による、中東・イスラーム研究の多角的な視座の提示は、自分にとって重要なことであった。

また、講義の後に続くディスカッションにおいては、それぞれの先生方が自らの専門領域からの多様な視点を持ち寄り、大変興味深い議論が展開された。中でも、「イスラームですべてを説明できるわけではない」というくだりには、衝撃を受けたといっても良い。イスラームは中東地域を研究する上で重要な要素である、しかしそれがムスリムを、彼らの社会をすべて説明できるわけではない。頭ではわかっていたものの、自分がいかにムスリム、ムスリム社会をステレオタイプ化していたのかを、思い知らされた瞬間であった。加えて、講義の内容に関しては、研究の視点、方法論、また諸先生方が研究者となられた経緯などが語られ、研究者を目指す受講生にとっては具体的で参考になる話を聞くことができた。

また、昼食や、講義終了後の飲み会など、初対面の先生方に対し、気軽に自分の研究を話し、アドバイスを受けられたことも重要なことであった。とりわけ、先生方の調査での経験談などを聞くことは、文献などからは得られない貴重な体験であった。その他、同じ興味関心を持った受講生との交流も重要な経験であった。そして、以外にも私自身が感じていた「自分の周りに中東研究者が少ない」という状況は、ほとんどの受講生の間で共有された悩みであり、それは同時に日本国内における中東・イスラームの研究者の数が少ないことを実感させた。しかし、講義においてある先生が発言されたように、周りに中東研究者がいないことは、その分は私たちに高い説明能力が求められるということである。その意味において、私や他の受講生が置かれている状況は、一つの修練の場とも捉えることができる。

本セミナーは4日間という短期間であったが、内容は充実したものであり、私や他の受講生も有意義な時間を過ごすことができたと思う。最後に、このような機会を設けてくださった諸先生方、ならびにAA研のスタッフの皆さまに深く感謝の意を表したい。

## 志村 文子(東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程)

この度は、中東・イスラーム教育セミナーに参加させていただき、ありがとうございました。中東・イスラーム研究の専門家である先生方、アジア・アフリカ言語文化研究所の연구원の方々、そして多様な研究テーマを持っている受講生に囲まれ、貴重かつ有意義な4日間を過ごすことが出来ました。

今回、このセミナーに参加して特に印象に残ったことは、第一に、中東・イスラームの名の下で広がる研究の広範さ、複雑さそして面白さです。セミナーの内容や受講生発表からも明らかなように、地域では東南アジアから南アジア、中近東諸国、欧州に広がり、方法論では歴史学、社会学、政治学、人類学、法学、アーカイブズ学と幅広く研究が行われています。様々な地域で多様な切り口から研究できる面白さを再認識する4日間となりました。

第二に、地域ごとの特性や違いを意識せずに「中東」と一括りにして語ってしまうことや、言葉の深みを考えずに何でも「イスラーム」という言葉で説明しようとする態度に対し、反省するきっかけにもなりました。多種多様なイスラームが存在する中で、「イスラーム」ということばで実態を覆い隠し、うやむやにして理解したつもりになっていることがいかに多いかを考え直すことができた点からも、今回のセミナー参加が有益であったと実感しています。

第三に、セミナー参加者の研究分野や関心事項から学ぶことが非常に多かったことも印象に残っています。講義を担当された先生方のご報告や受講生発表はそれぞれがユニークで、見聞を広めることができただけでなく、発表に対する質問やコメントからも多くを学ばせていただきました。それぞれの研究がユニークな中で、共通する部分や相互に関連する部分もたくさんあり、自分の関心や問題意識を広げることができました。また、先生方のご報告の中で、研究のきっかけや研究史を具体的に話して下さるというのも、この教育セミナーのユニークさで、参考になるだけでなく、とても励みになりました。

レジュメをセミナー前に配布することで理解を促進したり、受講生が交流しやすくするために関心分野や研究テーマを事前に知らせたり、改善を重ねながら、是非この企画を続けてほしいと思います。

最後になりましたが、お忙しい中ご参加下さった先生方、貴重なアドバイスを下さった연구원の方々、セミナー全日程を通じてご支援いただいた事務局の皆様、そして各地から集まってくださった受講生の皆様に、重ねて御礼申し上げます。

## 林 奈緒子(東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程)

「正統イスラーム」という考え方への大塚先生の厳しいご批判が端的に表すように、中東・イスラーム世界の多様性を改めて考えさせられた貴重な4日間だった。

本セミナーに参加して、私は主に二つのことを自覚することができた。一つ目は、「知っている」という思い込みが、対象を見る目を曇らせるということである。このこと自体、当然持ち合わせていた認識のはずであったが、いつの間にか視野が狭くなっていたのだと、イスラーム世界の多様性を示して頂いたことで痛感した。二つ目は、私の複眼的視点の未熟さである。これは反省点であるが、事前に配布されたセミナー・発表概要やレジュメに目を通すくらいのことしか出来ず、セミナーによっては初めて見聞きする内容のことも多かった。そして質疑応答になり、十分に自分の考えをまとめる事ができない回がしばしばあった。しかし他の受講生、そして先生方からはより多くの様々な質問が飛び交った。その着目点の鋭さには大きな刺激を受け、また知識不足は勿論であるが、それとは関係のないところで自分がいかに多くのことを見落としているのかを自覚した。

これら二つの反省は私にとって非常に大きな収穫であり、自身の研究活動において、今後も常に意識すべきことである。また、普段なかなか接する機会のない他大学の院生と語り、諸先生方から研究に対するそれぞれの考えをお話し頂いたことで、文献と格闘する日々に、大きな後押しを頂いたと思う。

最後に、過去のセミナー受講生の感想を読んで、本セミナーが年々改善されていることを感じた。まだ改善点はあるのだろうが、何よりもセミナー受講生一人ひとりの、より積極的な参加が大切であろう。

末筆ながら、お忙しい中ご参加下さった先生方、運営にあたり細やかなご配慮を頂いた先生、事務局の皆様方に厚くお礼申し上げます。

## 久田 美菜(立教大学大学院文学研究科・博士課程前期(比較文明学専攻))

「多文化共生」という言葉がここ数年、よく聞かれる。実は、私の研究対象地域はイスラームではなく、太平洋に浮かぶ島「小笠原諸島」である。1830年代に欧米系住民が住み始め、以来特定の国には属さず「雑居地帯」であったが、幕末になり近代国家作りに目覚めた幕府は、この島を急遽領土化した。欧米文化や南太平洋文化、そして日本文化—とまさに「多文化共生」の代名詞のように思える島だが、実際行ってみると「強制→矯正→共生」の歴史であったことを痛感する。フィールドワークの大切さを実感したわけだが、そんな私にとり、20年間同じ地域や同じ家族と接しながらフィールドワークを続けてこられた西井先生のご発表は、とても参考になった。また、受講生の発表に対する大塚先生をはじめとする諸先生方のコメントはとても鋭く、まさに私に言われているような気がして、身が引き締まる思いがした。

「まったく書かれなかったことを読む」といったのはヴァルター・ベンヤミンであるが、本セミナー参加後、同じことを「イスラーム」についても感じた。私とイスラームとの出会いは、以前勤務していた某国の大使館がきっかけであり、私にとって「大使館」という狭い世界でのイスラームがすべてであった。そしてそれは確固たるものだと思っていた。だが、世界が多様化しているのと同様、イスラームも多様化しているのだということをこのセミナーを通して実感した。先生方のお言葉、受講生の発表、参加者のコメント—様々な言葉を咀嚼して、まず頭をよぎったのが冒頭のベンヤミンの言葉であった。本セミナーは、ある意味今までの私が知っているイスラームとは全く違ったイスラームとの出会いの場ともなった。改めて、様々な世界に顔を出してみるものの必要性を感じた。複合アイデンティティ、共同体、境界線を生きるということ。つながっていないように見えて、私の中では研究対象(小笠原)とイスラームはそう遠からぬ存在である。それをどう表現するかがこれからの私の課題である。

同じ大学内で、あることについて議論をすることは日々のことですが、遠方を含めた他大学の方々と講義を聞き、議論に参加できる機会はそうそうありません。自分の勉強不足を猛省すると同時に、修論で煮詰まっていた私にとり、多くのことを示唆していただいた4日間となりました。最後になりましたが、このような貴重な場を設けて下さった諸先生方や快適な環境を常に提供して下さった事務局の方々に、心から感謝申し上げます。